

東坡の詩の技巧は様々に發揮される。「雪」をテーマとした作も多く、次の「雪詩は」八首の連作で、それぞれ雪の「声・色・気・味・富・貴・勢・力」を詠じたものである。(一〇五九年頃?)
 第一首は、「声」の詩である。

雪詩八首 其一

石泉凍合竹無風 石泉凍合し 竹に風無し

夜色沈沈萬境空 夜色 沈々 万境空し

試向靜中間側耳 試みに靜中に向て 閒かに耳を側つれば

隔窓撩亂撲春蟲 窓を隔てて撩亂として 春虫を撲つ

【語釈】凍合：凍り閉ざす。萬境：あらゆる場所。○撩亂：入り乱れる。

【通釈】岩の間からほとぼしり出る泉も凍り、竹にはそよとも風が吹かない。あたりはしんしんと静まり、この世界には何もないかのようだ。この静寂の中で、じっと耳をすましてみると、窓に、春の虫が入り乱れて当たるとような音がする。

蘇東坡一〇〇選 石川忠久より抄出

「雪詩八首(其二以下)」(参考)

其二 (色)

閑來披篋學王恭 閑來 篋を披いて 王恭を学び

姑射群仙邂逅逢 姑射の 群仙 邂逅して逢ふ

只爲肌膚酷相似 只だ 肌膚の 酷だ相似たるが為に

繞庭無處覓行蹤 庭を繞つて処として行蹤を覓むる無し

【通釈】閑なるままに王恭の真似をなし鶴篋を披いて起つて徘徊すると、ゆくりなくも、藐姑射の山の群仙にであった。しかし群仙の肌膚は雪と甚だ相似たるにより、庭をめぐるって尋ねても、どこへ行ったか、その跡が分からない。

其三 (氣)

半夜欺陵範叔袍 半夜 欺き陵ぐ 範叔の袍

更兼風力助威豪 更に風力と威の豪なるを助く。

地爐火暖猶無奈 地炉 火暖かなるも 猶ほ奈かんともする無し

怪得山林酒價高 怪み得たり 山林 酒価の高きを

【通釈】夜半の寒さは、範叔の襜袍を圧倒するほど、おまけに風力すさまじく、その豪威を助けているからたまらない。囲炉裏の火は暖かでも何の効もなく、山林ばかりのこ

の片田舎に於いて、酒価は高くして容易に買われぬというのは、さてさて困ったものである。

其四 (味)

兒童龜手握輕明
斬礮槍旗入鼎烹
擬欲爲之修水記
惠山泉冷釀泉清

兒童 手を龜きして輕明を握り
斬く槍旗そうきを礮てんし 鼎に入れて烹る
擬ます これが為に水記を修ませしむと欲す
惠山泉は冷やかに釀泉は清し

【通釈】子供らは、手のかじかむにも拘らず、雪を握り、やがて茶を磨り潰し、それにまぜて鼎中に煮ている。よつてこれが為に、天下の水の記を作ろうと思うので、惠山の泉は冷やかに釀泉は清く、これを兼ねたのは即ち雪の水である。

其五 (富)

天工呈瑞足人心
平地今聞一尺深
此爲豐年報消息
滿田何止萬黃金

天工 瑞を呈して 人心足る
平地 今聞く 一尺深し
此れ 豐年の為 消息を報ず
滿田 何ぞ止ただ 万黄金まんおうごんのみならん

【通釈】天工を以て祥瑞を呈したのは、能く人心を満足せしめるので、平地の上に、雪は一尺も積もっている。これは豊年が其の消息を報じたので、滿田、得るところはただに万金のみではない。

其六 (貴)

海風吹浪去無邊
倏忽凝爲萬頃田
五月涼塵渴人肺
不知價值幾多錢

海風 浪を吹いて 去つて辺無し
倏忽しゅうこつ 凝こつて 万頃の田となる
五月の 涼塵 人肺を渴す
不知 價值 幾多の錢

【通釈】海風 浪を吹いて、その限りだにない。さしもの海はみる間にこおって、万頃の田となつてしまった。五月の夏の真中に人の肺を渴せしむる時、涼しき塵と見まがうこの雪は、どれだけの価値があるか分からぬ。

其七 (勢)

高下横斜薄又濃
破窓疏戸苦相攻
莫言造物渾无意
好醜都來失舊容

高下 横斜 薄く又濃かに
破窓 疏戸そくこ 苦くるに相攻む
言ふ莫れ 造物 渾べて意なしと
好醜 都來とらい 旧容を失う

【通釈】雪の降り来る其の勢いは、高下 横斜 薄くまったり又濃かになつたりもし、破窓疏戸をめがけて頻りに攻め立てる。造物は渾べて意思がないと言わずもあれ、こういう風に、変化きわまらざる間に於いては、本来の美醜はすべて跡方も無くなつてしまふのである。

其八 (力)

萬石千鈞積累成 万石千鈞 積累して成る

未應忽此一毫輕 未だ応に 此の一毫の輕きを忽ゆるがせにするべからず

寒松瘦竹元清勁 寒松瘦竹 元と清勁

昨夜分明聞折聲 昨夜 分明 折声を聞く

【通釈】雪が積み重なると、万石千鈞の重量にもなるが、そのもとは一毫の輕きに過ぎず、よつてこれをゆるがせにしてはならぬ。寒松瘦竹はもと清勁の物であるが、雪が重なるに堪えかねて、昨夜、明らかにその折れる声をきいた。

国訳漢文大成雪詩八首

国訳漢文大成より抄出

南堂五首 其一

江上西山半隱堤 江上の西山 半ば堤に隠る

此邦臺館一時西 此の邦 台館 一時西

南堂獨有西南向 南堂 独有 西南に向ふあり

臥看千帆落淺溪 臥して見る 千帆の淺溪に落つるを

【通釈】大江の上の西山は半ば包みに隠れる。この国の台館は一時みな西面して作る此の南堂はただ是れ西南に向かつて建築する。この故に臥して千帆の淺溪におちるのを見ることが出来る。

「南堂 五首」(参考)

国訳漢文大成南堂五首

江上西山半隱堤 此邦臺館一時西 南堂獨有西南向 臥看千帆落淺溪

暮年眼力嗟猶在 多病顛毛卻未華 故作明窗書小字 更開幽室養丹砂

他年雨夜困移床 坐厭愁聲點客腸 一聽南堂新瓦響 似聞東塢小荷香

山家為割千房蜜 稚子新畦五畝蔬 更有南堂堪著客 不憂門外故人車

掃地焚香閉閣眠 簟紋如水帳如煙 客來夢覺知何處 掛起西窗浪接天